

竹山に家を建てた翌年、小さな畑作りを手伝ってくれた町内のMさんから「石塚さんのところで木は植えないのかい、マルメロなんか香りが良くていいよ。」とすすめられた。Mさんからの提案は疎かにできないので畑の近くに少し大きめの穴を掘ってMさんからもらった土を入れて植えることにした。木の苗を扱っているところを数件見て歩くうちに、食べられる実のなる木も植えたくなった。その時植えたのはマルメロの他、梅とブルーベリーとカシスだった。その後、梅とマルメロは実ができるまでには時間がかかるが毎春、香りの良い花を咲かせて家の周りに彩りを添えてくれた。ブルーベリーとカシスはすぐに実がでる年々収穫も多くなってきた。

さらに欲を出してプールの苗を二株植えた翌年の春。雪解けとともに姿を現した木々の根元の様子がなにかおかしい。妙に白っぽいのだ。近づいて良く見ると細かに削られた跡がある。それも根元を一周し高さ十センチメートルくらいがそうになっているではないか。プールに至っては五十センチメートルほどの苗の全てが削られていた。Mさん曰く「これはネズミにやられたね。」

木の表皮のすぐ下には、葉が光合成でつくった炭水化物などのエネルギー源を根に運ぶ重要な管があるのだが、そこをやられてしまったのだ。土の中の水を葉に運ぶ管はさらに奥にあるので傷つけられていなかった。なので、その年は何も無かったかのように花を咲かせてくれた。ただ、翌年になると元気がなくなりマルメロは葉を落とすこともなく立ち枯れてしまった。梅は蕾をつけてもう一年かなと思ったが、その蕾も硬いまままで終わってしまった。

木熊の下からネズミの家族がぞろぞろ出てきたときには、これ以上食べられてしまわないようにすぐに木熊を解体し、芯の小枝を取り除き風通しの良い状態に積み直した。そして冬を前にした雪囲いの際には、木の根元と土の間を覆うように頑丈なシートを被せておいた。ただ、それでも何本かのブルーベリーが犠牲になってしまった。このような食害はネズミだけでなく、ここK市ではエゾシカ、アライグマ、キツネなどによる農業被害は年間延べ五・五ヘクタールにもなるようだ。

植物にダメージを与えるのは動物だけではない。あれは竹山での最初の夏だっと思うけど、敷地のなかで一、二をあらそう大きな木であるハンノキが夏の盛りなのに葉が茶色になってしまった。良く見ると葉はレース模様のように葉脈を残して向こうが透けて見える状態になっていた。近くには小さな黒い甲虫がウヨウヨうごめいている。調べると文字通りハンノキハムシというものらしい。この虫は大発生することがありほとんどの葉は食べられてしまう。なんせ、葉に産み付けられた卵が孵化して幼虫になると一ヶ月ほどもりもり食べ続け、その後土に潜り蛹になるのだが、二週間ほどで羽化して成虫になり、また、冬が来るまでもりもり食べ続けるのだそうだ。ハンノキが枯れてしまうのではと心配になり駆除を試みるがきりが無い。これが二、三年続くとピタリといなくなり、ハンノキもその間、枯れることはないのだそうだ。



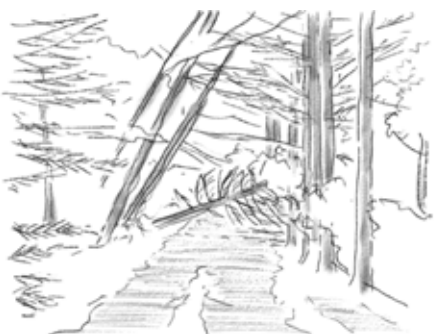
敷地の中を歩いていると時々、比較的太い枝が落ちていることがある。風で折れたのかなと思っていたがそうでもなさそうだ。木々を見上げてみると枝の付け根の樹皮がきれいに無くなっているのが目についた。ネズミはあんなに高いところまでわざわざ登っていくとも思えなかつたし、プルーンだとかの若木に比べると硬くて不味そうだ。現場を押さえたわけではないが、どうもアカゲラやコゲラなどのいわゆるキツツキか、ゴジュウカラの仕業というかお仕事のような気がする。これはまったくの推測だが、そもそも枝の付け根はその先の枝や葉の重みや風などの力に耐えなければならぬので亀裂が得意やすい。ほんの小さな亀裂でも、できてしまうとそこは菌類や昆虫の絶好の棲家や栄養になる。鳥は樹皮の下に潜む昆虫を狙って樹皮を剥ぎ取りにかかる。そうすると水分や養分の行き来が妨げられやがて枝は枯れて落ちる。そんなところかもしれない。木も元気な枝や葉に生きる力を集中させたいところだが、自分では剪定ができない。それを菌類や昆虫や鳥が手伝っているのではないか。ここに暮らしてただただ樹木や草の様子を見てみると、そのような意図せぬ繋がりがいろいろなところで感じられる。ただ、ときには荒々しい試練もやつてくる。

二〇一八年の九月五日の未明、前日に近畿地方に大きな被害をもたらした台風二十一号が日本海を北上し、ここでは珍しいゴーツ、ゴーツという唸り声がしばらく続いた。朝になれば雨風も収まっていたが、家から出る道に大きな木が何本も倒れ行き来ができない状態になっていた。敷地のなかも見慣れた景色が少しおかしいと感じ見て回ると、あちこちに根ごと土から引き剥がされた木が何本も横たわっていた。あれだけどしりと立っていた木がいとも簡単に倒されているのを見ると、地球の大気の移動である風だが、その力の凄まじさに怖気付く。

空を見上げると鬱蒼としていた場所が、妙に明るくなっていた。それまで空を覆っていた木々の葉が木ごとなくなってしまうのだから。その後どうなるのか。おそらく倒れた木のうちヤナギなどは生命力が強いので根が少しでも土に残っていれば、すぐにでも新しい芽が出て枝になっていくだろう。日当たりの悪かったところは、春先のまだ木々の葉が茂らない前に目覚めるスミレがほぼ独占していたが、これからは、そうはいかなくなるかもしれない。この時を待っていたヨモギやセイタカアワダチソウが準備を始めているだろう。

このように大風、大雪、洪水、大火事など、それまでの環境を一変させる出来事を「攪乱」というらしい。この攪乱があるおかげで、その環境で優位な種だけが占有を続けるのがリセットされ、生命の更新が促進されたり、種の多様性やが保たれるということか。それにしてもやるのが荒っぽい。

台風が通り過ぎた翌六日の未明に、震度五弱の地震に襲われた。胆振東部地震だ。我が家の被害は、棚のガラス器が床に落ち飛び散っただけで済んだが、震度七の激震に襲われたところはいたるところで山体崩壊が発生し、木々だけでなく多くの方の命が失われた。



昨年春には集中豪雨があり一時間当たりの雨量としては過去最高を記録した。また、冬には二十四時間降雪量として過去最大を記録した。雪はその後も断続的に降り積もり今までにない積雪量になってしまった。これには樹木も悲鳴を上げ、多くの木の枝が折れてしまいヤナギの木などは幹自体が裂けてしまったものもあった。

私たちが竹山に暮らして五年であるが、その間に、大風、地震、豪雨、大雪といった攪乱を体験したことになる。過去もこんなに頻繁に攪乱があったのだろうか。攪乱は再生と多様性を保つための仕組みだとしても、頻度や規模が大きくなると、自然の再生力が追いつかない事態にならないか心配になる。

錯乱といえば、私たちが暮らすこの土地も人の手によって引きおこされた錯乱から始まっている。なだらかの丘陵を掘って埋めて平らな土地をつくるのに災害の威力とまでは言わないけれど、重機の力でさほど時間をかけずに済んでしまう。それも植物が再生するのに重要な表土をほとんど剥ぎ取って形を整えてしまう。幸いにして、この開発は規模も小さく、その後には続くことがなかったから、まわりの自然の力をいただいて半世紀かけて再生しつつあるが、もしこれが、規模も大きくなって続けに拡大する開発だったらこれもどうなっていたか。人が手に入れた重機という道具は、錯乱と同様の環境変化を頻繁に際限なく引き起こすことができるのだ。そして、その結果は再生と多様性とは異なり、不可逆的にして均質な場所になってしまう。

この土地を手に入れたときにいただいたアドバイスに中古のユンボを手に入れるべきとというのがあって、妻が苦い顔をしたのを思い出す。この程度の規模の土地であれば、小型のユンボさえあれば掘るのも運ぶのも積み上げるのも燃料さえあればなんでも簡単にできてしまうだろう。そして、やってしまった結果には長い時間付き合わなければならぬことになる。人の手が入るということは、大なり小なり攪乱的な行為であるが、その結果については再生と多様性を失うものであってはならない。この竹山で時間を過ごすうちにそういう気持ちになってきた。

人の手が入るといっても手作業であれば自然の再生力の方がはるかに勝る。草を刈ることひとつとっても、鎌で刈る程度であればちょっとぐらい妻が大切にしていた草花を切ってしまったも、いつの間にか知らん顔で戻っていてくれる。さすがに太い丸太の玉切りはチェーンソーがなければ苦しいが、ここでの作業はできる限り手作業にこだわることにした。そうすることが自分自身にも良いことがある。おかげで食事制限などせずに自然にダイエットできるし、年をとっても筋肉を維持できる。S市のまちなかにいたときは近くのホテルのジムに通っていたこともあるが、それに比べてお金もかからないし、筋肉自慢のおじさんたちの圧に耐えることもなくて済む。なにしろ気持ちが良いのだ。清々しい空気をいっぱい吸って、穏やかな風景に囲まれ、汗を流す。こんな贅沢を味わわない手はない。

